

# 『永すぎた春』の冒頭部

## —— 小説的言説の分析例 ——

吉 田 廣

### 1 登場人物について

この論考は、三島由紀夫著『永すぎた春』（新潮社・1960年発行）の出だしの数ページを分析対象とする。ここには、木田百子という女性、宝部郁雄という男性、郁雄と同学の男性が登場する。また、時間的構造(structure temporelle)と説話的構造(structure narrative)の二つの観点から眺めると、ここで描写されているのは、木田百子と宝部郁雄の初対面であると言うことができよう。尤も、より厳密に述べるならば、僅かな時間的齟齬(anachronisme léger)が認められないこともない。

つまり、次の文章は、この小説の正しく冒頭に置かれているものなのだが、時間的にも説話的にも、それ以降の文章よりも後に位置すると、考えられるのである。

百子は、あんまり愛しすぎている、とよく思うことがあった。一念を貫ぬきとおしたからここまで来たのだが、ここまで来たからと云ってそれで安心して、感情を節約するというのが、できるものではなかった。

郁雄のやさしさが、少しでも減って来る兆候がみえたわけではない。しかし郁雄は、あきらかに安心していった。百子より安心して、その愛し方には切迫したはげしさのかわりに、大らかな強いものが加わった。これは当然の、また好ましい変化である筈なのだが、百子には一概にそう言いきれぬものがあつた。

二人は一月十五日の成人の日に、とうとう婚約したのである。

ここまで漕ぎつけるのは、実に並大抵のことではなかった。映画なら、そこまでの波瀾万丈で一時間半を費して、二人の婚約でハッピー・エンド

になるところである。

Momoko pensait quelquefois qu'elle l'aimait par trop. Bien que je sois venue jusqu'ici en gardant perpétuellement mon propre principe, se disait-elle, je ne peux contenir ma sentimentalité sous prétexte d'être venue jusqu'ici.

Or il n'y avait nul symptôme qui indique la diminution de la douceur d'Ikuo. Mais il était évident qu'Ikuo se trouvait rassuré. Il était plus rassuré que Momoko; sa manière d'aimer n'était plus ni violente ni pressante, elle était plus généreuse et plus forte. Cela allait de soi que ce soit un changement naturel et positif, mais Momoko hésitait tout de même.

Ils s'était enfin fiancés le Jour de majorité (quinze janvier).

Il était plus que difficile d'amener les choses à ce rivage. Si c'était un film, on aurait utilisé une heure et demie pour décrire ces vicissitudes et on les auraient conclues en *happy-end*.

なお、上掲の引用文は原文では縦書きであり、それに続くフランス語の文章は筆者の試訳である。ここで試訳を殊更に添えるのは、筆者自身の語学上の自己鍛練のためばかりではない。所与の文章を他の言語に翻訳し、双方を比較してみることは、その文章の理解を的確で鋭利なものにする恰好な手段なのであり、翻訳文を原文に照合することによって興味深い発見に至ることがあるのは、後述でも少しく示されるところである。

ところで、先に「郁雄と同学の男性」と形容した登場人物には名前が付けられていない。けれども、この人物は我々の二人の主人公の邂逅を齎す重要なキーパーソンであることは疑いを容れないので、その挙動を逐一追っていくことにしよう。

まず、言説的挙動(*comportements discursifs*)であるが、これが八箇所ばかりある。その内から、二つだけ拾い上げてみることにしよう。

「まあだまされたと思って行ってみろよ。わかったら、ひやかしたただけで、出て来ちゃえば、損もしないじゃないか。よかったら……」

《Bon! Allons! pense que tu sois trompé. Si tu es gêné, montre-toi froid et sors! De toute façon, tu ne perds rien. Et si tu veux...》

「じゃ九十円でいいや」

《Alors, que ce soit quatre-vingt-dix yens!》

実のところ、前者は、「同学の男性」の、ここで問題にしている言説に出てくる最初の直接的発話行為(énonciation directe)なのであり、後者は、同じ登場人物の最後のそれに他ならない。背景描写(descriptions de décor)の観点から言及するならば、始めの発話行為は大学の構内でなされており、後の発話行為は古本商のカウンターの傍らでなされていると言える。

次に、実際の挙動(comportements pragmatiques)であるが、この点に関しても、最初と最後の行動描写(descriptions de comportement)のみを掲げることしよう。

だから春のある日のこと、友人に、学校の門前の古本屋の娘が美人だと  
きいて、のぞきに行くだけの若者らしさは、ちゃんと持っていた。

Aussi, un jour de printemps, quand un ami lui a dit que la fille du  
bouquiniste devant la porte principale de l'École était très belle, Ikuo  
avait-il ce jeune désir d'aller la voir.

友だちと彼女と断乎として言い合ったが、おもしろそうに成行を見ている  
郁雄の目に合うと、少女はぷっと吹き出した。友だちもこらえかねて吹  
き出した。

「じゃ九十円でいいや」

と友はあっさり本を投げ出した。

Elle et l'ami disputaient de belle façon. Mais la jeune fille n'a pu  
s'empêcher de rire en voyant Ikuo regarder la situation avec un bon  
air intéressé. Et l'ami aussi de pouffer de rire.

《Alors, que ce soit quatre-vingt-dix yens!》

Et le livre a été docilement jeté par l'ami.

筆者の試訳の中でギユメで括った箇所は、実際の挙動というよりも、言説的挙動であることは論を俟たない。それ以外の箇所は、「郁雄の友人」の行動を描

写していると一応言えよう。しかし、そればかりかと言うと、そうでもないのは勿論であるが、その「友人」の視座(point de vue)に立つとき、以上の文章が直接的にも間接的にも言い及んでいるものは、彼の一挙手一投足であると見なすことができる。

登場人物についての考察は、この辺りで一先ず打ち切ることにして。なお、木田百子と宝部郁雄の言説的挙動や実際の挙動は、以下の引用文中の随所で喚起されている。

## 2 時間構造について

繰り返しになるが、『永すぎた春』の冒頭の十行程度は、その後の言説よりも、物理的な時間の観点からも、説話的な時間の観点からも、前置 (antéposition) されている節がある。

尤も、厳密に言うならば、これ以外のアナクロニズムは随所に見出せるのであって、例えば次の件りは、明らかにこの物語全体よりも時間的に前に位置すると言えよう。

雪重堂書店というその風流な店名は、先代（つまり百子の祖父）が、白楽天の

已訝衾枕冷

復見窗戸明

夜深知雪重

時間折竹声

という五言絶句「夜雪」からとったもので、これだけでも、木田百子の家の古めかしさが、想像されようというものである。

Le nom poétique de Secchôdô-shoten a été choisi par le grand-père de Momoko, fondateur de la librairie, en souvenir de Po Kiu-yi :

Déjà ma couverture et mon oreiller semblent froids

Puis mes fenêtres me paraissent claires

Je sais que la nuit est profonde sous la neige abondante

Parfois mes oreilles saisissent des buits de bambous.

C'est un poème chinois de cinq *kanjis* et de quatre lignes, dont le titre est 《La Neige de nuit》 et qui ferait imaginer comme la maison de Momoko Kida est ancienne.

閑話休題。先に物理的時間(*temps physique*)・説話的時間(*temps narratif*)に言及したが、物理的な時間とは形式的時間(*temps formel*)と言い換えてもよい。同様に、説話的な時間とは内容的時間(*temps matériel*)と形容することができよう。前者は言説の印字方向に流れる時間のことである。それに対して、後者はあくまでも説話者の観点に立った時間のことであって、物語に描かれている出来事や事件が生起した順序と言い換えてもよい。例えば、次の文章に即して、このことを考察してみよう。

友だちと彼女と断乎として言い合ったが、おもしろそうに成行をみている郁雄の目に合うと、少女はぷっと吹き出した。友だちもこらえかねて吹き出した。

「じゃ九十円でいいや」

と友はあっさり本を投げ出した。少女はまだ郁雄のほうを見ながら、

「あなたたち、グルなのね」

と言った。郁雄はびっくりして赤くなった。

——これが二人の初対面であった。

Elle et l'ami disputaient de belle façon. Mais la jeune fille n'a pu s'empêcher de rire en voyant Ikuo regarder la situation avec un bon air intéressé. Et l'ami aussi de pouffer de rire.

《Alors, que ce soit quatre-vingt-dix yens!》

Et le livre a été docilement jeté par l'ami. Le jeune fille, cependant, en regardant toujours Ikuo, a prononcé ces mots.

《Vous, vous êtes de connivence!》

Fort étonné, Ikuo a rougi.

—— Voilà ce qui s'est passé au moment de la première rencontre de nos personnages principaux.

物理的時間がこの文章の流れに沿っているのは論を俟たないので、説話的時間のみに視座を限局することにしよう。まず、初めの三行は、場所的には古本商のカウンターを喚起しており、言説的には百子と「郁雄の友人」との対話を描写している。但し、郁雄自身は、二人の対話者の傍らにいる存在だという意味において場所的要素とも言えるし、二人の対話に無言裡に加わっているという意味において言説的要素とも言えなくはない。あるいは、その二つを止揚した何かであるとも考えることもできようが、一方、最終行はどうであろうか。この行は、場所と言説を超越した、説話者の言葉そのものに他ならない。従って、引用文の最初の七行と最後の一行との間には、形容し難い時空的断絶があると言える。あるいは、レヴェル(niveau)の上での齟齬と言った方がよいのだろうか。

ところで、話頭をアナクロニズムの問題に戻せば、次の件りが注目される。

友がずんずん奥へ入ってゆくのに、郁雄は気はずかしく、店先に積まれている三十円均一の駄本なんかを、ていねいに見ていた。

「草花栽培の秘訣」

「社交ダンス読本」

「心霊術の科学」……等々。

そのとき、店の奥から、若い女の声と友の声とがかわるがわるきこえた。友は自分の売る本を高く売りつけようとし、女の声は渋っているのである。

Tandis que l'ami pénétrait sans façons dans le fond de la librairie, Ikuro regardait consciencieusement des livres bon marché, au prix unique de trente yens, entassés à l'entrée de Secchôdô-shoten; il était très gêné.

《Les Secrets de la culture florale》

《L'Introduction à la danse de salon》

《La Science du spiritisme》...

A cet instant, du fond de la boutique, la voix d'une jeune femme et celle de l'ami ont frappé l'une après l'autre l'ouïe de notre héros. Tiens! mon ami cherche à vendre cher son propre livre, alors que la voix

féminine est hésitante.

この切片(segment)の中で、書籍の表題が羅列されている箇所には焦点を当ててみよう。即物的には、それらの本は、花形的登場人物「郁雄」の眼前に置かれている物象である。しかし、歴史的には、それらがものされたのは、この物語の始まる基本的時点の前である可能性が強い。このような意味では、説話の流れの上で当該の箇所は時代錯誤的であり、パラテキスト的(paratexte ; 所与のテキストの本筋の傍らに配置された要素)である。

### 3 空間構造について

これまでも随所で言及したことだが、当該の箇所には「雪重堂書店」という、古本を商う店が度々出てくる。次に掲げる一節は、その古本店の沿革を端的に述べたものだと考えられるだろう。

焼け残った大学の前には、これも焼け残った古い書店が軒を並べていた。戦前のけしきをそのまま、戦争末期の空襲の最中も、悠然と店をあけ、戦後の混乱時代も、平然と古本を売っていた。雪重堂は、大学の法学部、経済学部、文学部などの研究室を、古いおとくいにしていて、代々の部長とも、主人は友だち附合をする仲であった。学者尊敬癖も雪重堂代々の病いで、そろばんを度外視して、いつまでも勘定を待った。実際はそんなものでもないのだが、百子の祖父も父も、学者ほど心のきれいな、神様のよくな人種はない、と思い込んでいたのである。

Devant l'Université qui n'avait pas entièrement brûlé, on voyait de vieilles librairies qui avaient également échappé à l'incendie. Comme avant la Guerre, durant les bombardements aériens de la fin de la bataille, elles étaient en fonction sans répit; ensuite, pendant l'après-guerre désordonné, elles vendaient tranquillement des livres d'occasion. La librairie Secchôdô avait l'habitude de fréquenter les bureaux d'études des Facultés de droit, d'économie, des lettres, etc. Et les doyens se montraient amicaux avec ces bouquinistes, qui étaient trop respectueux

des savants pour exiger sévèrement d'eux le compte. Car, malgré tous les inconvénients, le père de Momoko ainsi que son grand-père avaient cette croyance : il n'y a personne d'aussi pur et parfait que les savants!

この文章中に「雪重堂代々の病い」とあるが、厳密に言うと、「雪重堂」の創業はいつであったのだろうか。「百子の祖父も父も」という字句をそのまま信用するならば、「百子の祖父」がこの古本店を始めたのだと見なせるのかもしれない。けれども、それは、あくまでも「百子」の記憶に基づいた場合の話である。従って、彼女の曾祖父が実際の創始者であったという推定なども可能である。

ところで、もう一つの主要な場所として、そして、「雪重堂書店」と道路を隔てて相対する空間として、「T大」が当該の言説に出てくる。この大学のことを示唆する語句は、所々に散見されるのだが、その纏まった描写は、次の数行に求められるであろう。

学生同士は、こんな会話を交わしながら、正門へ出る道のいちょう並木のあいだを歩いていた。春の新学期のはじめだったから、いちょうは青々と芽ぶいていた。安田講堂から正門へむかうそのひろい舗道は、今朝がたの雨に、ところどころちいさな水たまりを残していた。しかしそれに映っているのも、今は晴れた空の、やわらかな春の雲であった。

午後の講義がおわる。空はまだまだ明るい。春である。制服を着け、やすりきれた書類鞆を下げ、カツカツと靴音を立てて、正門を出るときの心持。……それで二十一歳だったら、そののこりの一日に、何かを期待して胸をときめかせない筈はない。それに、上野の花はもうおしまいだから、大学の裏門から池ノ端へ出て、お花見をしようなどという酔狂な気持ちも起きない。

Les deux étudiants, en échangeant ces paroles, marchaient entre les rangées de ginkgos de la promenade menant à la porte principale. Comme c'était le commencement de la rentrée printanière, les ginkgos poussaient en verdissant. La large voie pavée, qui conduit de la tour



de conférences Yasuda à la porte principale, avait encore par-ci par-là de petites flaques puisqu'il avait plu ce matin-là. Or ce qui se reflétait sur ces flaques, c'étaient de doux nuages de printemps contre un ciel maintenant rayonnant.

Les cours d'après-midi sont finis. Le ciel est encore clair! On est au printemps. Quel sentiment qu'on a en sortant de la porte principale! En portant l'uniforme d'étudiant, en tenant à la main la serviette un peu usée, en faisant des bruits légers avec ses chaussures!... Et on a vingt et un ans; le reste de la journée doit avoir quelque chose d'inespéré et d'émotionnel. Puis, comme les cerisiers ne sont plus en floraison au jardin d'Ueno, cette envie n'est pas vive d'aller les voir à Ikenohata derrière l'Université.

説話者が「T大」と呼んでいる大学は、実際にはどの大学を指すのであろうか。あるいは、なぜ「T大」と、アルファベットの「T」を用いて、漢字を用いなかったのだろうか。はっきりとは断定できないけれども、幾つかの推測は可能である。

第一に、TはTôkyôの頭文字であると考えられる。そして、「大」は「大学」の略称であろうから、「T大」は[tokjo-daigaku]と読むことができる。第二に、TがTekokuの頭文字であると見なすならば、「T大」は[tekoku-daigaku]と読める筈である。あるいはまた、以上を組み合わせ、時代錯誤的に[tokjo-tekoku-daigaku]と読むのもよいかもしれない。

しかしながら、このような錯綜した事態を生み出すことになるのは、「T」と「大」とを結合させるという、仕方そのものに在ると思量されないこともない。つまり、《Tôkyô Daigaku》とか《Teikoku Daigaku》とか、さらには《Tôkyô Teikoku Daigaku》と表記するという遣り方もあったであろう。また、悉く漢字を用いて「東京大学」・「帝国大学」・「東京帝国大学」の何れかをを使うのも、よかったかもしれない。尤も、この言説の中で描き出されている時代は、正に混乱の最中にあったわけであるから、こうした穿鑿をすること自体に、どれほどの意味があるのかという疑義が当然のごとく抱かれてくる。それ

からまた、単に《l'Université》とか「大学」とかの簡潔な呼称を使えば、よりスムーズに事は運んだ筈であるとも言える。何れにしても、問題の大学が東京の本郷にあったのは事実であろう。

本郷界限にはいろいろと新しい喫茶店も店びらきをし、学生をよびあつめるために、垢ぬけのした女の子を置いている店もあったが、郁雄の友だちは、気品といい、美しさといい、何が何でも、雪重堂の娘の右に出る者はない、と言うのであった。

Le quartier de Hongô voyait les ouvertures de cafés neufs, lesquels employaient de jolies filles pour attirer les étudiants; mais les amis d'Ikuo disaient que soit la qualité, soit la beauté, la fille de Secchôdô était décidément la meilleure.

#### 4 説話構造について

当該の言説中には、二十余りのカギ括弧(crochets japonais)が使われている。その内、最初のカギ括弧は例外的であって、パラテキスト的な用い方がなされている。すなわち、白楽天の五言絶句の表題を提示する際にそれが使用されているわけであるが、さらに、「三十円均一の駄本」のタイトルを列記するのにもそれが用いられていたことが、思い起こされる。これら以外のものは直接話法(discours direct)の切片だと見なせようが、その内、次の箇所を観察してみることにしよう。

「まあだまされたと思って行ってみろよ。わるかったら、ひやかしただけで、出て来ちゃえば、損もしないじゃないか。よかったら……」

「よかったら？」

「……そうだな。本を買うより、売りに行ったほうが、話ができるな。君、なんか売りたい本はないか？」

「俺、本を売ったってことがないんだ」

「仕様がなのお坊ちゃんだな」

《Bon! Allons! pense que tu sois trompé. Si tu es gêné, montre-toi

froid et sors! De toute façon, tu ne perds rien. Et si tu veux...》

《Si je veux?》

《...Euh! Oui, tu pourras mieux parler en vendant un livre que si tu en achètes un. Mon cher, tu n'a pas quelque livre à vendre?》

《Moi, je n'ai jamais vendu aucun livre》

《Tu es un vrai garçon de bonne famille, quoi!》

この引用箇所を見る限りでは、どれが「郁雄」の言説で、どれが「郁雄の友だち」の言説なのか判然としないが、文脈から推し量るならば、一番目のディスクール・ディレクトは後者のものであることが分かる。そして、以下は、交差配列法(méthode de croisement)に則って、直接話法の切片が並べられていると言えるだろう。因みに、「郁雄」の二箇所の言葉が極端に短いのは何故かと言えば、幾つかの理由が挙げられるだろうが、第一に、友人の話に多少の戸惑いを感じているし、第二に、古本商の店に行くこと自体に躊躇しているのかもしれない。

それでは、マル括弧(parenthèses)については、どうであろうか。最初にそれが出てくるのは、先に引用した箇所にも見えていた、「つまり百子の祖父」という字句を囲むものである。これは、もちろん、同格的に補足説明する語句を提示する機能を果たしている。同格的補足説明と言え、もう一箇所、上掲の五言絶句の書き下し文にも、マル括弧が用いられている。すなわち、「すでに訝る衾枕の冷やかなるを。また見る窓戸の明らかなるを。夜深くして雪の重きを知る。時に聞く折竹の声」の箇所である。

また、間接話法(discours indirect)に話頭を転ずれば、これも枚挙に暇がないかもしれないが、一見して間接話法が使われていないような件りにすら、それが使用されているものである。

郁雄はT大法学部のまじめな学生で、学校へはちゃんちゃん出ていた。学校のかえりにも、あっちこっちへ引っかかって帰宅がおそくなるというタイプの学生ではなかった。世間では、青年の墮落が嘆かれ、若い兇悪犯の続出が怖れられているというのに、郁雄はこんな風潮を、どこ吹く風かという顔をしていた。いったい墮落などは、墮落の才能のある人間でなく

てはできない相談で、自分にはそんな才能はないものとあきらめていた。

Ikuko était un bon étudiant à la Faculté de droit de l'Université T... Il y allait régulièrement. Et puis, s'agissant du retour de l'École, il n'appartenait pas à ces étudiants qui tardent à rentrer à la maison en passant par-ci par-là. La plupart des gens craignaient que la jeunesse se dégrade et que le nombre des jeunes délinquants horribles augmente, mais comme si de rien était, Ikuko négligeait une telle tendance des mœurs. Au fait, il se résignait en se disant que de toute manière, la dégradation n'était pas possible aux personnes incapables de se dégrader et que lui-même n'avait pas cette capacité.

この試訳の二箇所でディスクリート・インディレクトが使われているのは歴然としているが、日本語の原文の方はどうかと言うと、これも同断であって、「嘆かれ」や「怖れられ」は「嗟嘆や恐怖をもって語られ」を意味するのだし、「あきらめていた」は「諦念の気持ちをもって独白していた」と言い換えることができると思わせる。

以上では、当該の言説を主として登場人物の観点から眺めてきたが、説話者の観点から検討すると如何がであろうか。尤も、この問題提起は自家撞着的であるとも言えそうである。なぜなら、斯論の分析対象である言説全体が、説話者によって創出された言葉に他ならないからである。例えば、既に訳出した冒頭の十行程度の箇所（「百子は、あんまり」から「ハッピー・エンドになるころである」まで）は、説話者が、時間的齟齬を取って犯して、「結」の部分を行先させたものだと言えよう。また、最後の箇所「これが二人の初対面であった」は、それとは好対照に、「起」の部分を後置させたものだと見なすことができよう。それでは、次の切片はどうだろうか。

百子は古い言葉で言えば、才色兼備で、頭のあまりよくない兄に比して、店で扱っている本の名を、いつでもすっかりソラで言えた。たとえば客が、「川口さんの『日本法制史』の下巻はありますか？」

ときく。

「はあ、法学叢書の版ならございますけど」

「もっと新らしい版がいいんだけど」

「菊波書店の改訂版でございますね。あれなら一週間以内に、取り寄せられると思いますけど」

ざっとこんな調子である。

Si l'on emprunte une vieille expression, Momoko était 《pleine de talent et de beauté》 et pouvait toujours dire parfaitement par cœur les titres des livres en vente dans la boutique, ce que ne pouvait faire son frère aîné un peu lent d'esprit. Par exemple, un client lui demande :

《Avez-vous le dernier volume de *L'Histoire de la politique juridique au Japon* par Monsieur Kawaguchi?》

《Oui, nous avons l'édition de *La Collection de droit*》

《Je voudrais une nouvelle édition》

《Ce serait l'édition révisée des Éditeurs Kikunami, n'est-ce pas? Je pense que l'on peut l'avoir avant une semaine》

Voilà, sommairement, ce qui illustre le dialogue de Momoko avec ses clients.

先程からの論の進め方からすれば、この箇所は「承」に当たるのであろう。すなわち、「これが二人の初対面であった」を受けて、物語(récit)の上で、説話者はこの場面を設定しているのである。ただし、言説(discours)の上では、以上のような枠組み(ordre)との歴然たる相違点が指摘されねばならない。例えば、引用箇所の出だしの「百子は古い言葉で言えば、才色兼備で、頭のあまりよくない兄に比して、店で扱っている本の名を、いつでもすっかりソラで言えた」は、物語学的枠組み(ordre narratologique)から見ると、なるほど「承」としての取り扱いが可能である一方で、社会学的枠組み(ordre sociologique)から見ると、そのカバーする時間幅(durée)は、単なる物語上の一通過点という規模を遥かに凌駕していると言うべきであろう。このように述べ来れば、一口に「説話構造」と言っても、その内実は相当に複雑であるのが窺い知れる。

## 5 今後の展望として

斯論の標題にも示されているように、これまでは三島由紀夫の一小説の冒頭部の分析を繰り返してきたわけだが、この論考の射程は予想外に潤沢であると言えるのかもしれない。なぜなら、如何なる小説にも導入部分はあるのだし、さらにまた、如何なる詩篇にも開始部分は設けられているのだから。あるいは、どのような文章にも始まりはあるのだと言う方が、より適切であろうか。そして、言説の冒頭部には、我々読者の創造的読解に資するための種々様々な「鍵」が盛り込まれているとは、誰しも日々の経験から感じ取っていることであろう。筆者は、この論考を通じて、『永すぎた春』を読む上での、そうした幾つかの「鍵」を構造分析という立場から提示しようと試みたわけだが、いずれにしろ、三島由紀夫の文章研究をこれからも継続していく必要はあるように思われる。

### 主 要 参 考 文 献

- DUBOIS (Jean), GIACOMO (Mathée), GUESPIN (Louis), MARCELLESI (Christiane), MARCELLESI (Jean-Baptiste), MEVEL (Jean-Pierre), *Dictionnaire de linguistique*, Paris, Larousse, 1973.
- FONTANIER (Pierre), *Les Figures du discours*, Paris, Flammarion, 1977.
- GENETTE (Gérard), *Figure III*, Paris, Seuil, 1972.
- GREIMAS (Algirdas Julien), *Sémantique structurale, nouvelle édition*, Paris, PUF, 1986.
- Groupe  $\mu$ , *Rhétorique générale*, Paris, Larousse, 1970.
- *Rhétorique de la poésie*, Bruxelles, Complexe, 1977.
- MAZALEYRAT (Jean), MOLINIE (Georges), *Vocabulaire de la stylistique*, Paris, PUF, 1989.
- SUHAMY (Henry), *Les Figures de style*, Paris, PUF, 1988.
- TODOROV (Tzvetan), *Les Genres du discours*, Paris, Seuil, 1978.
- 三島由紀夫『永すぎた春』、新潮社、昭和35年。
- 吉田廣「二つの『石榴』」、大阪経済法科大学論集第55号、平成6年。